

資 料

日本の大学の授業に PSI を適用するためのマニュアル

田 中 敏*

A MANUAL OF PSI APPLIED IN JAPANESE UNIVERSITY COURSES

Satoshi TANAKA

A manual of Personalized System of Instruction (PSI) is being tried in the conditions of Japanese University courses. It consists of "Preparation" evaluating the cost of the system, e.g. time, space, labor, money, etc.; "Practice" also describing students', proctors', and teachers' behavior at every stage of the system; and "Problems" likely to be discussed in practice. As results from the three practical researches of PSI, the manual also recommends (1) keeping "proctors' seats" in the study hall, rather than proctors' rooms; (2) using some oral readiness test together with a written test by a proctor, and (3) giving several short lectures periodically as a pacemaker for the students' learning.

Key words: Personalized System of Instruction, University courses, practical researches, proctor, readiness test.

本論文は PSI を紹介し、実践研究に基づく PSI の準備・実行マニュアルを提供する**。

PSI の紹介

PSI (Personalized System of Instruction) とは, Keller (1965) によって大学の大人数授業を改善するために提唱されたシステムである。別名, 「ケラー・プラン」(Keller Plan) と呼ばれる。

PSI の目標は, 大人数授業の受講生の多さからくる弊害(学習の受け身化, 処遇の不平等, 他人による妨害, フィードバックの困難など)を取り除き, 学習者個人が大集団のなかに埋没するのを防ぐことである。この点, CAI (Computer Assisted Instruction) と同様, 学習指導の個別化という共通のテーマを追求しているように見える。しかし, CAI がマン・ツー・マシン (man-to-machine) システムによって学習者をコンピュータの出力系と対置させるのに対して, PSI は独自のマン・ツー・マン (man-to-man)

システムによってあくまで学習者と指導者の人間的接触を確保しようとする。したがって PSI は, 大学における旧態依然とした大人数授業の改善であるだけでなく, 今日では CAI において問題とされる過度の機械化・非人間化に対するアンチ・テーゼとしての意義も含んでいる。

PSI の研究は, Educational Technology, Journal of Personalized Instruction などの論文雑誌等においてすでに 1 千余件を越えており, 当初の「ケラー・プラン」よりいろいろに工夫されたバージョンが登場しているが, 共通の主要特徴をあげると以下のとおりである。

a. チームの構成: FIG. 1 にみられるように 1 つの授業

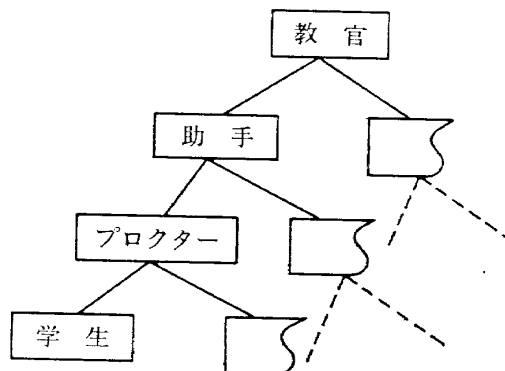


FIG. 1 PSI におけるチームの構成

* 上越教育大学 (Joetsu University of Education)

** 本論文が提供するマニュアルは, 田中・小松 (1983) の試作マニュアルを, その後の実践結果 (田中, 1986, 1987) に基づき日本の大学の実情に合わせて加筆・修正したものである。

の担当スタッフは教官・助手・プロクターからなるチームを組む。通常、教官は1人、助手は1・2人、プロクターは学生10人に1人程度の数になる。

b. プロクター制：プロクター (proctor) とは「補助指導員」であり、いわば学生の個人教師である。1人のプロクターは特定の10～15人の学生を受け持ち、1対1の形でテストの採点、口頭試問、学習の指示と強化、情報の交換などを行う。一般に、プロクターの役割には、その教科の単位を優秀な成績で取得している学部上級生や大学院生をあてる例が多い。

c. 小単元・完全習得方式と即時フィードバック：教材は小単元に分割され、系列的に配置される。学生は現在の単元をマスターしないと、次の単元の教材をわたされない。各単元の学習後にはテストが課せられ、その直後に、プロクターによる正誤のフィードバックと概念の訂正または定着が行われる。

d. 自己ペースの学習：学生は印刷教材を自己ペースで学習する。学習の時間と場所は限定されず、特定の時間帯の授業に出席を強制されることはない。学習上の疑問や困難については、一定の教室に待機している教官やプロクターに質問または相談することができる。

e. 出欠自由の講義：いくつかの単元を消化した学生に対して適宜講義を開く。この講義は知識の伝達というよりも学習の興味を増大させるためのものであり、内容をテストすることはない。出席・欠席も自由である。ただし、出席する場合は、出席資格として一定の単元数の消化が必要とされるので、直接的にも間接的にも学習の動機づけを高めることをねらいとしている。このように目的が副次的であるため、まったく講義を設けない実践例も少なくない。

これらの特徴のうち、PSIの決定特性はbのプロクター制を中心にした人員配置と学習過程の構成にある。

ここで、システムの運用例(田中, 1987)を学生の学習過程として記述すると次のようになる。①このシステムには「スタディ・ルーム」(教官・プロクター待機)と「テスト・ルーム」(管理者在室)があり、②学生は小冊子のテキスト(1冊子1単元)をスタディ・ルームその他で学習する(スタディ・ルームは共同の勉強部屋としてすすめてあるだけで、本来はどこで学習してもよい)。③その小冊子をマスターできたと思ったら、個々人が自由な時にテスト・ルームに「通過テスト」を受けに行き、④テストの答案を書き終えたら、それを持ってスタディ・ルームに戻り、自分の専任のプロクターに添削を申し出る。⑤プロクターは答案を添削し、その学生が完全正答に達しているか(または達する見込みがあるか)を質疑応答によって確認し

て、その単元の通過の可否を判定する。⑥通過可であれば2・3の質問をして、プロクターは学生に新しい小冊子(次の単元)をわたし、学生は②からステップをくり返す。⑦もし通過不可なら学生は現在の小冊子を学習しなおして、再テスト・再判定を受ける。⑧この間、一定数の単元を消化した学生を対象に何回か講義が開かれる。⑨評価は学期内に消化した単元数と学期末の総括テストの成績による。

さて、このようなPSIの有効性については、その研究例の多さからもわかるように良好な結果が得られている。Kulik, Kulik, & Cohen (1979)による75個の比較研究のレビューによれば、PSIは従来の講義形態の授業よりも有意に最終テストの得点を高め、“A”の評価を受ける学生を増やした。また、PSIは、知的成果だけでなく、学習の質の高さや楽しさの評定尺度得点においても従来の授業を上回ったということである。代表的な研究例として、Kulik & Jaksa (1977)の報告では、3つの測度(完全習得までの所要時間、最終試験の成績、保持と転移の成績)においてPSIは従来の講義形態の授業ならびにCAI, PI (Programmed Instruction)よりも優れていた。

以上のようなPSIをわが国に導入する是非は日米の教育風土のちがいもあり、一概には決められない。例えば、日本の大学は教養科目や基礎科目より専門科目を極端に重視する傾向があり、教官は学生に対して当該授業内での知的成果をあまり期待しない。学生の側も、一般教養や基礎課程の授業は予備的知識の学習というよりも専門課程へ向けての関心の蓄積や態度の形成と理解しており、正確な知識の学習は授業外でおこなうものと考えているようにみえる。

ここに、日本の大学の基礎科目または教養科目の大人数授業が、その弊害を甘受することのできる理由を得ているように思われる。このため、また、大学の授業をシステム化・プログラム化しようという動機は初等・中等教育課程の場合に比べて相対的に低く、むしろ反対意見も少なくない印象を受ける。

たしかに、知的成果の向上という観点からのシステム化については議論の余地がある。しかしながら、大人数授業における指導者と学習者の人間的接触の確保という観点からのシステム化については異論はないであろう。この意味において、PSIの基本思想すなわちマン・ツー・マン・システムによる個人化(personalization)には十分な研究と実践の価値が認められる。

そこで、本論文は、日本における今後の基礎資料の蓄積を意図して、PSIの準備と実行のためのマニュアルを

以下に提供しようとする。

PSIの準備・実行マニュアル

0 適用

0.1 対象科目

PSIの対象となる科目は、大学の一般教養または基礎課程の科目である。すなわち、知識の体系が確立している領域に限られる。研究状況が流動的な領域には適さない。また、受講生の研究発表や討論などを主体とする演習科目等にも適さない。

0.2 受講生数

受講生の人数には上限がない。数百人の規模であっても適用可能である。下限としては、30人以下の規模ではコスト・パフォーマンスが低いように思われる。すなわち、複数の教室を用意したり、何名かのプロクターを事前訓練したりする労力にみあうだけの人数ではない。その程度の規模ならば、PSIを適用するよりも、5・6人ずつの小集団を形成して集団ベースの学習に持ち込むほうがずっと経済的である。

1 準備

1.1 見積もり

1.1.1 時間

a. 当該科目に割り当てられる正規の時限：一般に、日本の大学では1週1時限となる。

b. 進度を回復したい者のための臨時の時限：これではなくてもよい。田中(1986)の実践では正規の時限とは異なる曜日の昼休み50分間に臨時の時限を設けてみたが、利用者数は伸びなかった。

c. 教官による講義の時限。

d. 指導スタッフの打ち合わせ時間。

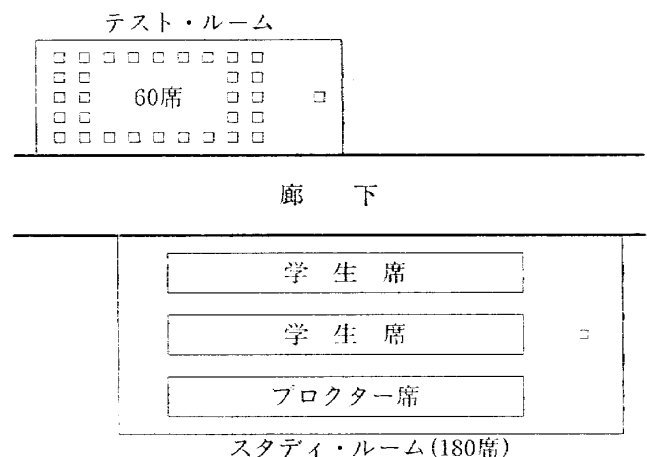
1.1.2 教室

a. スタディ・ルーム：受講生が共同の勉強部屋として利用する。教官・助手・プロクターも在室する。

b. テスト・ルーム：テスト専門の部屋であり、管理者1名が在室する。部屋の広さとしては、田中(1987)の実践では受講生120人に対して60席の教室をテスト・ルームとしたが、特に支障はなかった。受講生の人数の2/3程度の座席数があれば十分である。

c. プロクター・ルーム：プロクターと受講生との面接室である。プロクターの指導は1対1で行われるので、独立した部屋がプロクターの数だけそろえば理想的であるが、現状では実現困難であろう。

そこで、田中(1986, 1987)の実践では、上記のスタディ・ルームのなかに「プロクター席」を設けて、プロクター1人と受講生1人が並んで座れる机とイスを配置し



(注) 受講生120人、プロクター14人。

FIG. 2 教室の配置 (田中, 1987)

た (FIG. 2 参照)。このため、スタディ・ルームの広さは受講生の人数の1.5～2倍程度の座席数を見積もる必要がある。大教室がとれない場合は、複数の中教室に特定のプロクターと受講生を分割すればよい。

1.1.3 人員

a. プロクター：当該科目を前年度に優秀な成績で終了している学部上級生または大学院生が望ましい。有志またはアルバイトを募集するか、関連する少人数演習の受講生を当てる。後者の場合、カリキュラム編成において、PSIを適用する基礎科目の時限とプロクターを採用する専門科目の演習の時限を一致させるとよい(教室も大小2つとれる)。その場合、演習の単位はプロクターの役割を遂行することによってあたえる。演習独自の授業はないが、PSIにおけるプロクターと受講生は互恵的であり、プロクター自身にとっても再学習による知識の定着と受講生の指導のための学習の深化を期待することができるので、演習の意義を損ねることではない。なお、プロクターの人数は受講生10人あたり1名が適当である。

b. 助手：プロクター20人以下(受講生200人以下)なら特に必要なく、教官1人によってコントロールできるように思われる。

c. テスト・ルーム管理者：田中(1986, 1987)の実践ではアルバイトとして1人を募集した。

1.1.4 費用

教材となる小冊子とテストの用紙代・印刷代を見積もる。上記の人員をアルバイトとして雇用する場合は、その報酬額を算入する。

1.2 教材の作成

1.2.1 PSIの解説用パンフレット

受講生がPSIを初めて体験する場合、第1回めの開講時のオリエンテーションにおいて配布する。本論文の末尾に見本を付録として掲載する。

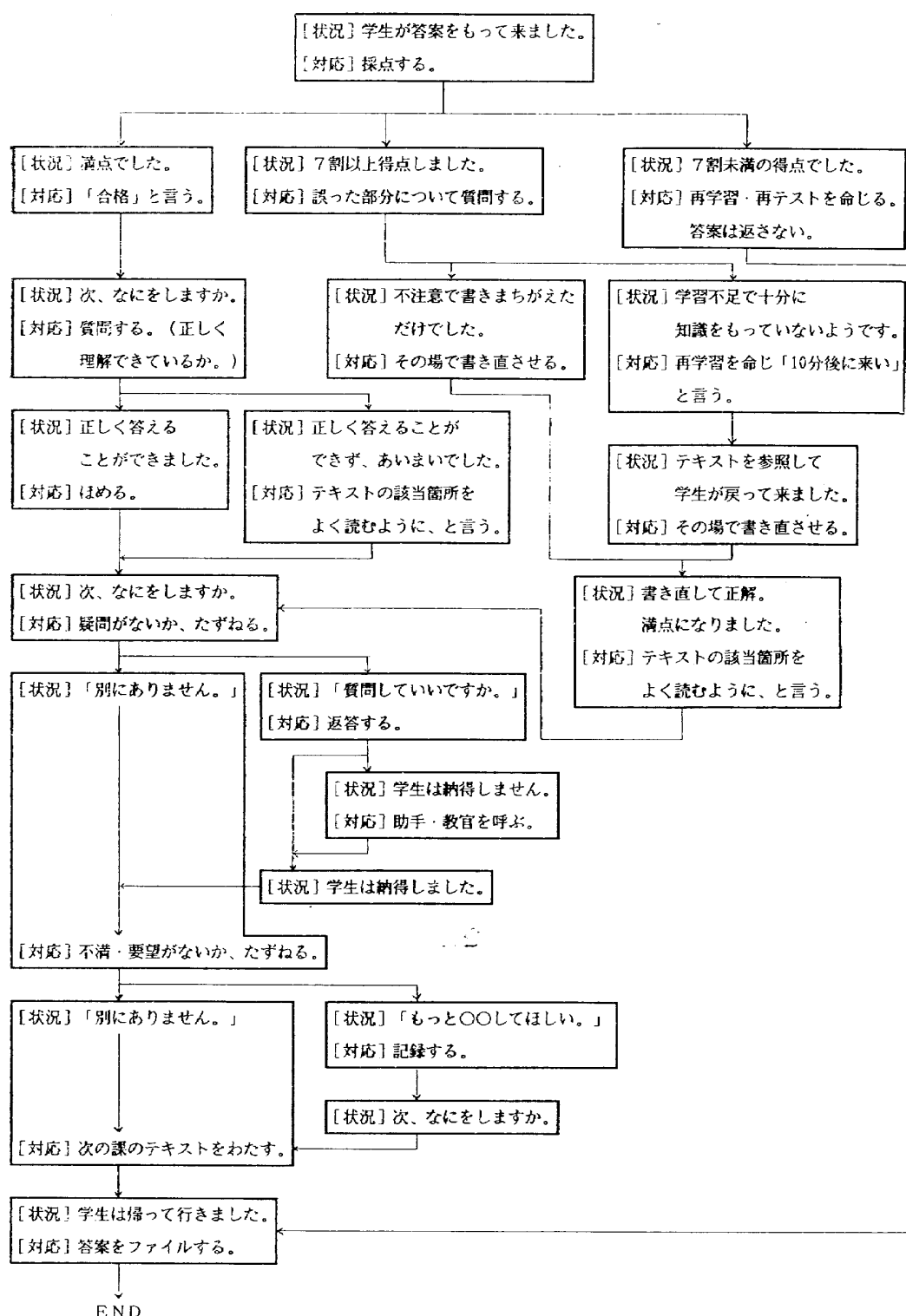


FIG. 3 プロクターの指導手順

1.2.2 テキスト（小冊子）

当該科目の内容を小単元に分割し、直線的に配列する。この配列は前後の単元が関連性をもつようにする。そして、1単元につき10～15ページの小冊子を作成する。田中（1986, 1987）では、このようなテキストを1学期間（3か月）に6冊消化することを課したが、通年換算で

200 ページ前後のテキストに相当する分量である。未達成者数は田中（1986）の実践において120人中12人、田中（1987）の実践において120人中3人であった。

1.2.3 テスト

a. 通過テスト（またはレディネス・テスト readiness test）：1単元につき1テストを作成する（問題用紙・解答用紙兼用とするほうがよい）。このテストは、当該単元をマスターし、次の単元に進むことのできるレディネスが形成されたかどうかをチェックする。一般に、合格基準は完全正答（100%正答）に置かれる。しかし、80%正答程度に基準を下げ、単元の消化数が増えるようにする場合もある。

b. 復習テスト（review test）。まとまりのある何個かの単元を対象としたテストである。大部分の問題項目は上記の通過テストから採る。復習テストも合格基準は完全正答である（そうなるように指導する）。田中（1986, 1987）の実践では用いなかった。

c. 総括テスト（summative test）。最終評価のためのテストであり、学

期末または年度末に課す。問題項目は、これまでの通過テストまたは復習テストから採る。

1.3 プロクターの事前訓練

1.3.1 テキストとテストの学習

田中・小松（1983）では、プロクター全員に対してテキストの内容を解説する時間をとった。この処置はプロ

クターにおいて当該科目が未修了であったためである。これに対して、田中(1986, 1987)では、プロクターは当該科目の修了者であったので、テキストとテストを実施前にわたして個別に学習させ、疑問・不明点のみを教官に問い合わせるということにした。これだけの方法でも、実践結果として、プロクターの力量に関する受講生の評価(4段階)は「たいへん力がある」と「一応力がある」を合わせて96.3%であった(田中, 1987)。さらに、実践中の観察であるが、プロクターは受講生との質疑応答を契機にテキストの内容以上の発展的学習を促されていたようにみえる。

1.3.2 指導手順の訓練

プロクターは、受講生のテストの答案を採点しながらマン・ツー・マンの指導にあたる。そこには過通判定も含まれているので、一定の手順を事前に訓練しておく必要がある。田中(1987)の実践では、基本的な状況を想定し、それへの対応のしかたをプロクターに覚えさせた(FIG.3参照)。この訓練はパーソナル・コンピュータを用いて「状況」と「対応」との対連合学習としてプログラム化し、プロクターが個別に自由な時間に練習できるようにした。

2 実行

受講生と教官・プロクターの行動を、それぞれの実行段階別に記述する。なお、助手の役割は教官・プロクターが兼任可能であるので省略する。

2.0 スタッフの役割

a. 教官：教材の選択、テキスト・テストの作成、プロクターの指導、プロクター・受講生間の問題の解決、不満・要望の処理、記録の整理と保存、講義、評価。

b. プロクター：特定の学生の個人指導(テスト答案の採点・添削、口頭試問、質疑応答、トピックの紹介、成績の記録、不満・要望の受理)。

c. テスト・ルーム管理者：テスト用紙の配布、室内の静粛さの確保。

2.1 オリエンテーション

a. 受講生：スタディ・ルームに集合する。

b. プロクター：同上。

c. 教官：PSIの解説用パンフレットの配布・説明、プロクターの紹介、特定のプロクターに付く受講生の指名、第1単元のテキストの配布を行う。なお、受講生にとってはメイン・プロクターのほかに臨時のサブ・プロクターを決めておくほうがよい。プロクターの指導は受講生一人ずつであるので、あとから来る受講生が待たされる場合があり、そのとき、サブ・プロクターに指導を受けられるようにする。田中(1986, 1987)の実践では、

待ちの行列ができたときは、専任のプロクターでなくとも手の空いているプロクターに指導を受けるように指示した場合があった(あとでプロクター間で受講生の記録を交換した)。

2.2 学習

a. 受講生：テキストの小冊子を学習する。学習の時間と場所は特定時限とスタディ・ルームに限定されない。スタディ・ルームを利用する場合は自由席となる。

b. プロクター：スタディ・ルームの「プロクター席」に待機している。手が空いていれば受講生の学習を見回り、質問を受け付ける。テキストの特定部分について、プロクターを中心にした輪読を企画してもよい。

c. 教官：同上、および、プロクターへのテキストの供給を行う。

2.3 テスト

a. 受講生：1単元を十分に理解したと思ったら、テスト・ルームへ行く。テキストの持ち込みはできない。

b. テスト・ルーム管理者：受講生に単元名を聞き、テストをわたす。自由席、時間無制限であることを告げる。1時限終了の10分前に閉室する。受講生が書き終わらないときは、そのテスト用紙を次の開室日まで預かる。

2.4 プロクターによる採点と指導

a. 学生：テスト答案を持ってスタディ・ルームへ行き、自分の担当プロクターに答案をわたす。

b. プロクター：FIG.3に示した手順で採点、指導、通過判定を行う。テスト答案はファイルに保存する。なお、田中(1986, 1987)の実践結果として、先行の通過者から後続の受験者にテスト情報の漏洩があったという指摘を受けた。この問題は筆者の知るかぎりでは外国の研究報告に見出されないが、日本の大学生が知識習得よりも単位取得を優先する傾向があることを反映しているのかもしれない。対策としては、同一単元に複数種類のテストを用意する。あるいは、プロクターによる口頭試問の成績を通過判定に含めるなどが考えられる。これらの対策は直接に受講生間の情報交換を阻止するものではないが、PSIは学習者の自由と自己決定を最大限に尊重したシステムであるので、例えば一斉テストなどの拘束性のある対策を講じるのでは意義が失われる。むしろ、これは受講生自身の学習態度の問題であり、システムを利用するも悪用するも個人の意志にまかされていると考えるべきかもしれない。しかし、議論の余地はある。

c. 教官：「プロクター席」の近くに待機し、プロクターの要請に応じて、プロクターと受講生との討論や質疑応答に加わる。

2.5 1時限の終了時

a. 受講生・プロクター：退室。

b. 教官：プロクターが保存したテスト答案の枚数とテスト・ルームでの配布数が一致するかどうかをチェックする。また、一定期間を置いてプロクターからテスト答案を回収し、そこに添え書きされた問題や不満・要望を読み取る。なお、テスト答案は総括テスト1週間前に各受講生に返却する。

2.6 講義

a. 受講生：聴講資格と関心のある者のみ出席する。

b. プロクター：関心のある者のみ出席する。

c. 教官：一定数の単元を消化した受講生を対象に定期的に講義を行う。この講義は受講生の興味喚起と学習のペース・メーカーとして開き、内容はテストしない。講義をもたなかった田中(1986)の実践では、もっとも多かった不満は講義のないことであり(120回答中16人)、2番めに多かった不満は学習が無計画になりやすいことであった(同13人)。そこで、田中(1987)の実践では、2週間に1回、スタディ・ルームにおいて1時限の最初の20分間だけ定期的に講義をもった。この時間内は「プロクター席」を解消し、プロクターによる採点・指導を中止した。その結果、講義を自分の学習のペース・メーカーとして利用した受講生は20%(107回答中21人)であり、実際の各回の出席者数は120人中19~53人であった。したがって、大半の聴講者はかなり以前に通過した単元についての講義を聴取したことになり、講義の開き方は今後も工夫する必要がある。

2.7 評価

a. 受講生：全員が学期末または年度末の総括テストを受ける(一斉受験)。

b. プロクター：受講生の学習の記録を教官に提出する。

c. 教官：総括テストの成績と期間内に消化した単元数によって個々の受講生を評価する。

一般に、PSIにおける評価は「Aのインフレーション」と言われるほど高く出る。田中(1986, 1987)の実践においてもPSIの実施学期の評価は90%以上の受講生に“A”をあたえることになったが、評価基準をどうすべきかは教官の方針しだいである。

3 研究課題

3.1 学習材料の多様化

PSIでは、受講生にテキストとして印刷した小冊子をあたえるが、これはもっとマルチ・メディア化されてよい。1つの試みとして、田中(1987)の実践では、スタディ・ルームの一隅にVTRを据え、テキストの内容と

共通する教育用ビデオ・テープ(20分)を反復放映した。これも自由視聴であるが、一定期間内に連続して放映することを予告しておけば興味ある学習材料となる。

3.2 プロクターの能力・適性

一般に、プロクターとして要求される能力・適性は、教材の知識、指導の技術、対人適応性である。特に、良好な対人適応性はマン・ツー・マンの指導関係には不可欠であると思われる。これらのプロクター側の要因が受講生の学習にあたえる影響を研究する必要がある。

3.3 受講生の学習態度

PSIにおける学習の効果は、システムが受講生をコントロールするしかたよりも、受講生がシステムを利用するしかたにずっと強く依存している。すなわち、ある意味で、このシステムは受講生に特定の学習態度を求めている。例えば、日本の大学生は中学生・高校生の期間に「テストのための学習」に慣らされているが、PSIでは通過テストに何回失敗しても評価にマイナスになることはない。この点、PSIが受講生の学習態度を変化させることも期待できるように思われる。

3.4 大学以下の教育課程への適用

小学校・中学校・高等学校の授業へPSIを適用する方法も研究価値がある。この場合、最大の問題は、プロクターをどこから採用するかということである。大学のように「外部採用」というわけにはいかないのが、当該クラスのなかからの「内部採用」ということになるが、プロクターの選択基準やプロクターになった生徒と他の生徒の心理的变化などが研究テーマになるであろう。ちなみに、Werner & Bono(1977)は小学2年生の書き方と算数の授業にPSIを適用し、同一課題を早く修了した児童をプロクターに指名した。その際、この指名の方法をいろいろに変えて、どの児童もプロクターになれるように工夫している。また、日本において高等学校の数学の授業にPSIを適用した茂木(1986)は、プリ・テストによって1クラス49人中上位者7人をプロクターに任命した。そして、学期の終了時に「プロクターはクラスにいたほうがよいか」という質問に回答させた結果、いたほうがよいと答えた生徒は全体の18%、いないほうがよいと答えた生徒は34%であった。

引用文献

- Keller, F.S. 1968 "Good-bye teacher..." *Journal of Applied Behavior Analysis*, 1, 79-89.
Kulik, J.A., & Jaks, P. 1977 PSI and other educational technologies in college teaching. *Educational Technology*, 17, 12-19.

- Kulik, J.A., Kulik, C.C., & Cohen, P.A. 1979
A meta-analysis of outcome studies of Keller's
Personalized System of Instruction. *American
Psychologist*, 34, 307—318.
- 茂木秀隆 1986 Personalized System of Instruction
による授業改善の試み 昭和60年度筑波大学大学院
教育研究科修士論文
- 田中敏 1986 大学教職課程の授業における PSI の実
践報告 日本教育心理学会第28回総会発表論文集,
796—797.
- 田中敏 1987 従来の講義形態とプロクターの事前訓練
を取り入れた PSI の実践報告 日本教育心理学会
第29回総会発表論文集, 888—889.
- 田中敏・小松伸一 1983 個人学習指導システムの研究
—PSI の手引きとその実験報告— 都留文科大学教
育心理学研究紀要, 3, 31—44.
- Werner, T.J., & Bono, S.F. 1977 The application
of PSI to a second grade classroom, or, the lone
arranger rides again. *Educational Technology*,
17, 20—24.

付録：PSI のパンフレットの例

「教育心理学」の2学期の授業は、これまでの講義の形をとらず、「PSI」という授業システムにもとづいて実施します。

PSI とは “Personalized System of Instruction” (個人学習指導システム) の略です。以下、このシステムの解説を行いますので、よく理解してください。

〔学習のしかたについて〕

PSI は、あなたが、あなた自身のペースで学習してゆくことができます。今までのように、固定した時間割に合わせて受講したり、講義の進み方の速さ・遅さに悩まされたりすることはありません。調子が良ければ、1か月ですべての課題を終えてもよいですし、調子が悪ければしばらく休んで、好調な時期が来るまで待っても構いません。どのくらいのスピードで学習を進めてゆくかは、まったく、あなた自身にまかされています。

このシステムにおける2学期の課程は、全部で6つの課題に分かれています。したがって、テキストも6冊あります(それぞれ10～15ページ)。あなたは、これらのテキストを自分自身で学習してゆくことになります。

テキストを学習する順番は、あらかじめ決まっています。1つのテキストをマスターして、「通過テスト」に合格しなければ、次のテキストをわたされません。「通過テスト」とは、現在のテキストの学習が十分なされた

かどうかを試すテストです。

テキストは1冊ずつわたされます。このテキストの学習は、あなたの好きなように、いつ、どこで行っても構いません。例えば、昼食時に喫茶店で読んでも、大学から帰って自宅で読んでもよいわけです。一応は、この教室(B412:教室番号)で学習することをおすすめします。教室では、講義も授業もありません。この教室は、あなたと他の学生との共同の勉強部屋と思ってください。したがって、この教室を「スタディ・ルーム」と呼ぶことにします。

テキストの内容が十分理解できたと思ったら、廊下をはさんで向かい側の「テスト・ルーム」(B406:教室番号)へ行ってください。そこで、係員からテスト用紙を受け取り、試験を受けてください。つまり、各自が自由にバラバラにテストを受けに行くことになります。このテストが「通過テスト」です。テスト・ルームでは自由席、解答時間は無制限です。

通過テストに合格すると、次のテキストがわたされます。不合格なら、いまのテキストを再学習し、再度テストを受けなおすことになります。しかし、何回不合格になっても評価がマイナスになることはありません。

以下に、使用する教室を、もう1度書いておきます。

スタディ・ルーム→B412

テスト・ルーム→B406

なお、スタディ・ルーム、テスト・ルームとも正規の授業時間(10:30～11:45)に開いています。

〔講義について〕

さて、この授業システムにおいても、教官による講義を行います。通常の場合とちがって2週間に1回しか行いません。場所はスタディ・ルーム、講義時間は最初の20分(10:30～10:50)、内容はテキストの補足的・発展的説明です。出欠をとることはありません。講義の内容をテストに出題することはありませんので、出席しなくても評価は不利になりません。テキストだけでも十分に理解できますので、講義の時間中にテスト・ルームへテストを受けに行ってもかまいません。

講義日程は以下のとおりです。なお、第6課の講義はありません。

9月11日：第1課「学級を理解する」

9月25日：第2課「学級をつくる」

10月9日：第3課「学習意欲を高める」

10月23日：第4課「学習を指導する」

11月6日：第5課「個人差に応じて指導する」

〔指導人員について〕

この授業システムの指導人員は、1人の教官と15人の「プロクター」です。プロクターとは補助指導員という意味です。

プロクターは、いわば、あなたの個人教師です。専任のプロクターが一人、あなたに付くことになります。プロクターは、この授業科目の「教育心理学」をすでに修了した学部3・4年生と心理学を専門とする修士課程・博士課程の大学院生から選ばれています。

プロクターは、あなたにテキストをわたし、あなたのテストの答案を採点し、あなたの疑問点・不明点に答えてくれます。また、初学者の誤解や困難をよく理解して、学習のしかたや参考文献も示唆してくれると思います。あなたは、プロクターをじょうずに利用してください。プロクターは講義のない日は10:30～、講義のある日は10:50～、スタディ・ルームの「プロクター席」に待機していますので、通過テストの答案を書き終えたら、そこに答案を持って行って採点を申し出てください。

教官も常時スタディ・ルームに在室し、あなたの学習中の質問に答えたり、プロクターとあなたとの討論に加わったりします。

〔評価について〕

2学期の最後の授業時限（11月20日第2限）に「期末テスト」をスタディ・ルームにて行います。期末テストの場合のみ、上記の日時に全員の学生が出席し、必ず受験しなければなりません。期末テストの出題は、全6課の「通過テスト」のなかから出題されます。期末テストの成績は、あなたの今学期の評価の50%を決定します。残り50%は、2学期内に消化したテキストの冊数によって決定されます。

以下は、ある学生の受講例です。読んでおいて下さい。

〔受講例〕

わたしは大学1年生。「教育心理学」をとった。開講は木曜2時限。

初日の木曜日、教室にはいると100人以上の学生がいた。「PSI」のパンフレットと第1課のテキストをわたされ、教官の説明を聞いた。だいたい次のようなものだった。「出欠は一切とらない。自分自身のペースと責任で学習してもらいたい。2週間に1回、20分間の講義を行うが、その出席も自由である。通過テストを受けるときだけ出て来る必要がある。テキストは第1課から第6課まで6冊あり、学期内に消化した冊数と期末テストの成績によって評価を決める。」

この後、プロクターが紹介された。わたしと友人のS子は同学部3年生のPさんに付くことになった。

その日から、さっそく第1課の学習が開始されたが、

なんだかよくわからないので、もう1度パンフレットを読み直してから始めようということになって、その日は早々にS子と学食に退散した。

次の木曜日。スタディ・ルームが開室して最初の20分間だけ講義があったが、その後、出入り自由となった。テキストの学習はスタディ・ルームでやらなくてもいいということだったが、仲間がいたり、専任のプロクターがいたりするせいか、半分以上の学生が来ている。テキストは別に予習してこなかったが、講義を聞いて少し読んだら、テストを受けに行こうと思っていた。しかし、友人のS子が来ていないので行きにくくて、けっきょくそのまま帰ってしまった。

翌週の木曜日。S子とスタディ・ルームをのぞいてみたころは、11時をだいぶ回っていた。わたしたちのプロクターのPさんは一人の学生とテストの答案を前にしてなにか話し合っていた。受講の遅れた人は前の席でパンフレットを読んでいる。意を決して、テスト・ルームへ行った。20人程度の学生がいた。黒板に「自由席、時間無制限」と書いてある。係の人がいて第1課のテストをわたされた。テストは10個ほどの穴埋め問題と2・3個の記述問題からなっていたが、特にむずかしいということとはなかった。10分ほどで書き上げて係の人に差し出すと、答案を持ったままスタディ・ルームのプロクターのもとへ行くように言われた。スタディ・ルームに戻る途中、S子と答案を見せ合ったが、だいたい同じことを書いていたので安心した。

スタディ・ルームの「プロクター席」にいるPさんに答案の採点をお願いすると、一人ずつ指導するということなので、S子は「サブ・プロクター」のQさんのほうへ回った。

Pさんは、わたしの答案をザッと見て、3か所チェックした。そして、どうしてそう答えたのかと聞いた。その結果、2か所はわたしの表現がまずかったこと、1か所は問題を誤解していたことがわかった。その場で書き直して、満点をもらった。その後、少し質問された。あまりうまく答えられなかったので、テキストの該当ページを指定され、よく読んでおくように言われてO.K.が出た。最初にしてはよくできたねとほめられた。もし、不十分な理解をしていると再学習・再テストを言いわたすことになっているから気をつけてねと言われた。

Pさんは他に不明点や疑問点がないかをたずね、また、ある用語について具体例をまじえながら説明してくれた。最後に、次の第2課のテキストをわたされて帰された。

S子のほうを見たら、まだQさんと話し合っていた。

この後、第2課のテストに1回失敗し、再テストを受

けた。第5課はもっともたいへんで2回連続して失敗し、再々テストまでいった。仲間のなかには、先に通過した人からテストの問題やプロクターの口頭質問を聞いている人もいた。オリエンテーションの際、先生は、そうした「カンニング」には一切関知しないと言っていた。なぜなら、PSIは学生自身が自分で自分の学習行動を決定するシステムであるからということだったが、それにしても……とツイ思ってしまう。

最終的に全課程を通して3回不合格になったが、一応は自力でやってきた。不合格になっても評価とは無関係だし、かえってプロクターのPさんとの話し合いの機会が増えて、概念が鮮明になったりした。S子のほうが早

く進んで、途中から別々に行動するようになったが、なんだかそのほうが一人前の気がした。プロクターにもだんだんと困らせるような質問をすることができ、あるときはPさんが先生を呼んで応援をたのんだこともあった。それもなんとなく、うれしかった。

学期末のテストの1週間前に全6課を終了したが、結果として2・3回ほど自主休講できた計算になるようだ。他の人のなかには最初の1か月で全課を消化してしまった人もいたらしいが、とてもわたしにはまねできない。人それぞれでいいと思う。

(1989年9月29日受稿)